

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463571

研究課題名(和文) アディクション問題にかかわる看護職支援モデルの試案作成

研究課題名(英文) Development of tentative support model for nursing professionals who work in the field of addiction

研究代表者

寶田 穂 (TAKARADA, MINORI)

武庫川女子大学・看護学部・教授

研究者番号：00321133

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)： サンフランシスコで働く看護師(計9人)へのグループインタビューの結果をもとに、アディクション(主として薬物依存症)看護に携わる看護師の考えや実践の変化について明らかにした。その結果を、これまでの研究結果(日本での看護師へのインタビュー調査)と比較検討し、看護の質を向上する上での、看護職に対する支援のあり方について考察した。また、アディクションの問題にかかわる看護師を対象として、看護師を支援するためのグループを定期的に行い(参加者10人程度)、グループで語られた内容から、支援の意義やあり方について検討した。

これらの結果をもとに、アディクション問題にかかわる看護職支援モデルの試案を作成した。

研究成果の概要(英文)： We found out mechanisms and contributing factors of attitudinal shifts among nursing professionals working in the field of addiction, mainly of substance use treatment and care, based on results of the group interviews to 9 nurses in San Francisco. To consider by making comparison of the result with the past research results, such as the interview research for nursing professionals in Japan, we considered how to support nursing professionals to improve the quality of nursing care. We also had some support group of about 10 participants regularly to support especially the nursing professionals who work in the field of addiction. And we considered the meaning and future of the support based on the group discussion.

Based on these results, we developed the tentative support model for nursing professionals who work in the field of addiction.

研究分野：看護学・地域老年看護学

キーワード：精神看護 薬物依存症 アディクション 看護師 看護職支援モデル 感情

1. 研究開始当初の背景

薬物やアルコールの乱用、ギャンブルといった「害があるとわかっていてもやめられない」アディクション（依存症）は、専門的な治療や支援によって回復が可能な健康障害であることが明らかとなっている。しかし、社会においては、健康障害というよりも、道徳や性格の問題として、違法となる行為は犯罪として受け取られる傾向にあり、治療や回復支援の進展に影響を及ぼしている。保健医療においても、アディクションの問題をもつ人の受け入れに拒否的な施設も少なくない。

研究代表者はこれまで、アディクションの中で特に薬物依存症に焦点をあてて、看護に関する研究を行ってきた。これまでの研究から、看護師は薬物依存症を患う人（以下、薬物依存症者）とのかかわりで怒りや無力感といった苦しさをとまなうネガティブな感情を抱きやすく（寶田ら、2009）、その感情が患者とのかかわりを妨げていると考えられた。海外でも、薬物依存症者に対する医療職者のネガティブな態度については多々報告されている（Howard, 2000; Kelleher, 2007）。

アディクションの問題をもつ人には、心的外傷体験をもつ人が多く（Jacobsen, 2001）、心的外傷体験をもつ人への援助において援助職は、バーンアウトや二次的外傷性ストレス状態に陥りやすくなる（Stamm, 2003）。その状態が、アディクションの問題をもつ患者に対するネガティブな感情や態度に及ぼす影響は大きいと考える。

薬物依存症者に対する看護に前向きに取り組んでいる熟練看護職者を対象としたインタビュー調査からは、最初は患者との関係の中で悩んだり傷ついたりしながらも、知識を得たり先輩や周囲の人たちからのサポートを得ながら、患者の理解を深めていくなかで、患者との相互作用が治療的なものへと変化し、患者から自身の看護へのポジティブなフィードバックを受けることによって、看護の意味

をつかみ前向きになっていくプロセスが明らかとなった（寶田、2011）。

以上のことから、アディクションの問題をもつ人への看護に対して前向きに取り組んでいくには、精神的（感情的）サポートが必要であると考えられる。既存の日本の文献からは、アディクション問題にかかわる看護職サポートについての具体的な実践や支援のあり方についての報告を見出すことができなかった。

そこで、本研究においては、日本以上にアディクションが大きな社会的問題となっており、様々な治療や回復支援が行われている米国において、アディクション問題にかかわる施設での援助職との意見交換及び看護職へのインタビュー調査を行い、日本の現状と比較検討することによって、看護職に対するサポートの意義やあり方について検討することとした。また、研究者らは平成22年度から、アディクション問題にかかわる看護職サポートグループを実践しており、それを継続して行いながら、語られた内容からサポートの意義やあり方について検討することとした。そして、上に述べた研究で得られた知見をもとに、アディクション問題にかかわる看護職支援モデルの試案について検討することとした。

2. 研究の目的

(1) 目的1：「アディクション問題にかかわる看護職サポートグループ」の実践を通して、その逐語記録をもとにグループで語られた内容及びグループ・プロセスを質的に分析し、アディクション問題にかかわる看護職支援の意義やあり方について明らかにする。

(2) 目的2：海外（米国サンフランシスコ）においてアディクション問題にかかわる施設でのフィールドワークを通して、回復支援や援助職支援の実際について現状把握をする。また、アディクション（主として薬物依存症）の問題をもつ人への看護に対する考えや実践が変化していった体験を有する看護職へのインタビュー調査を行い、考えや実践の変化の

様相を描き出し、変化の構造や要因を明らかにする。なお、インタビューは、フォーカスグループインタビューした。

(3) 目的3：目的1と2の結果をもとに、文化による相違や共通性を検討し、日本におけるアディクション問題にかかわる看護師支援モデルの試案を作成する。

3. 研究の方法

(1) 目的1について

研究デザイン：実践データに基づく質的研究

実践内容：アディクション問題にかかわる看護師サポートグループ（感情や考えていることなど、自由に聴き語り合えるグループ）。

月に1回90分、1クールを10回とする。平成22年度に1クール目を開始。本研究期間終了までには、5クール目を終了。

対象者及び参加者：「看護実践の場で、アディクション問題をもつ患者や家族等のかかわりに困難や問題意識を感じている看護師」を対象とし、大阪近辺の看護職から参加者をつのり、応募があった看護師に、本研究目的・倫理的配慮等を説明し、研究への参加に同意が得られた人を参加者とする。

データ収集及び分析：語られた内容は同意を得て録音し、逐語録を作成する。逐語録の内容を質的帰納的に分析/解釈^{*}する。

(2) 目的2について

研究デザイン：フォーカスグループインタビューによる質的研究

対象者及び参加者：「薬物依存症者への看護を実践していく中で、薬物依存症者への看護に対する考えや実践が変化していった体験を有する看護師」を対象とし、サンフランシスコで研究協力者のネットワークを通じて参加者をつのり、応募があった看護師に、本研究目的・倫理的配慮等を説明し、研究への参加に同意が得られた人を参加者とする。

フィールドワーク：インタビュー調査に先立ち、サンフランシスコでの薬物依存症治療

や回復支援の実際について、病院や地域の回復施設等でのフィールドワークを行い、現状把握する。

データ収集及び分析：フォーカスグループで語られた内容は同意を得て録音し、逐語録を作成する。逐語録の内容を質的帰納的に分析/解釈^{*}する。

※目的1・2の逐語録の分析/解釈方法

- ① 逐語録全体を大切なところにハイライトを入れながら読み、全体の流れを把握する。
- ② 最初から読み直し、部分の要約をしたりしながら、テーマ（大切な概念や言葉）を抽出する。
- ③ ②で抽出されたテーマを元に、全体の文脈と照らし合わせながら、中心となるテーマを抽出する。
- ④ ②③は行きつ戻りつ行い、テーマ間のつながり検討しながら、記述する。

(3) 目的3について

日本での看護師へのインタビュー調査結果（寶田、2011）と目的2の調査結果とを比較検討し、また目的1の結果と照らし合わせ、アディクション問題にかかわる看護職支援モデルの試案の素案を作成する素案について、日本のアディクション看護領域での熟練看護師（3～5名）との実践者会議を開催し、その検討結果をふまえ試案を作成する。

4. 研究成果

(1) 目的1について

①サポートグループの実施

各クールの期間、開催場所、総人数、平均参加者数は、表1に記す通りである。

表1. 各クールの参加者数等

クール	期 間	場 所	登録者数	研究者数	総人数	平均参加者
1	H22年8月～23年5月	大阪市大	10人	3人	13人	7.8人
2	H22年8月～23年5月	大阪市大	8人	3人	11人	7.6人
3	H24年11月～25年8月	大阪市大	8人	3人	11人	8.1人
4	H25年12月～26年9月	大阪市大	11人	3人	14人	10.1人
5	H27年5月～28年2月	武庫川女子大	10人	3人	13人	9.1人

5 クール全ての総登録者数は、47 人であった。
5 クール全ての参加が 1 人、4 クール参加 1 人、3 クール参加 4 人、2 クール参加 7 人と複数クルールの参加者を含むため、登録者の総計は 26 人であった。

②各クールにおける語りの特徴

各クールにおける、語られた内容及び語られ方等の特徴は、表 2 の通りであった。

表 2. 各クルールの語られた内容等の特徴

クール	1→	2→	3→	4→	5
語られた内容・語られ方の特徴等	社会問題として、周囲で生じていること(事例)としての語り。ケア対象者への両面的な感情。ネガティブな感情を自身の感情としてつかひことの困難。事例の報告。(学会発表、寶田ら、2012)	(新たな参加者は左記の傾向も、継続しての参加者の語りを開きながら、「私は」として語りへ。)			
	アディクション問題をもつ人とのかわり生じたネガティブな感情を自身の感情として認識することの難しさから、自身の感情ととらえ素直な表現への移り変わり。 「私たち(看護師)は、○○と感じる」→「私は、○○と感じる」。(学会発表、奥村ら、2015)	自身か、看護の現場で困った事例の話題提供。			
		病院の看護システムの問題意識と感情。患者への共感の深まりと、組織の無関心等との間での葛藤(ダブルバインド)。「看護師は」から「私は」へ。「私を分かってくれたい」			
		精神科の看護とは何か。見えにくいケア、見えない成長。語ることでの互いの気づき、学びの共有、相互支援。「私を分かってくれたい」として内化か?)			

③考察：メンバー個々が自身の感じたことと考えてことを自由に話すのには、話せる場作りが重要であった。また、自然な感情や気づきの表現を聞く(モデルとなる人が存在する)中で、自身のネガティブな感情に気づき適切な表現ができるようになり、共感や気づき、学びの共有、相互支援といった能力が高まっていくと考えられた。

(2) 目的 2 について

①フィールドワーク

場所：米国サンフランシスコ

期間：平成 25 年 11 月 16 日～22 日

内容：

a. アディクション問題の治療やリハビリテーションにかかわる施設の見学及びスタッフとの意見交換

- Asian and Pacific Islanders Wellness Center (アジア・東南諸島系移民のための歴史ある HIV 治療施設。多くのクライアントが薬物依存歴を有する)

- Health Right 360/Walden House (薬物依存症回復施設、デイ・ナイトケア)

- East Bay Community Recovery Project/Project Pride (歴史ある薬物治療施設。刑期をつとめられる母子寮、母子寮の幼児が通う幼稚園がある)

b. アディクション問題での入院施設の見学及びスタッフとの意見交換

- San Francisco General Hospital/University of California, San Francisco, Department of Psychiatry (カリフォルニア州立大学の中の医学部附属病院である、サンフランシスコ総合病院内、精神科の中の、薬物治療部門)

c. アディクション専門のサイコロジストのレクチャー及び目的 1 のサポートグループのスーパーバイズ

スーパーバイザー：Nancy Piotrowski, Ph. D.
(クリニカルサイコロジスト、依存症に関する心理学系の連邦政府におけるコーディネータ)

②フォーカスグループインタビュー調査

場所：米国サンフランシスコ

期間：平成 26 年 11 月 14 日～22 日

フォーカスグループの実施：研究者らのネットワークを通して、本研究についてのアナウンスを行った結果、10 数名の応募があった。そのうち、日程の調整が可能であった 9 名を参加者とし、2 人(日本からの移住者)、3 人、4 人の 3 つのグループを開催した。グループインタビュー時間は、最初の 2 人が 110 分、3 人が 45 分、4 人が 107 分であった。

結果(図 1 参照)：生活の中で家族や友人といった身近な人々の薬物問題を体験していた看護師は、看護に携わる以前から、薬物依存症者に共感的であった。体験のない看護師は、ネガティブな感情を抱いていた。しかし、それは経験の中で、共感的な感情へと変化していった。

多くの参加者が、患者に対する共感の深まりと「ジャッジしない non-judgment」姿勢の重要性を認識していった。彼らの知識や理解の変化は、個々の患者に関する知識や理解の

深まりでもあった。患者とのかかわりを通し、患者の人生の過酷さと回復に向けてのサポートについての知識や理解を深めていた。

以上のような変化は、他の看護師からのサポートや現任教育の影響が大きいことが語られた。参加者の多くは、薬物依存症者に対する偏見や差別が同じ看護職者の中でも存在していることを認識していた。そういった偏見や差別に対しては、変化につながるようなポジティブなフィードバックの実践に向けての意志についても語られた。

薬物依存症への看護に関する看護師の変化:米国

看護師 計9人へのフォーカスグループインタビュー調査より

過去	変化	現在(インタビュー時)
(現在教育や周囲の人々からのサポートの中での変化)		
A 哀痛・同情・理解(家族、友人等、身近な人の薬物問題の体験のあるNs.) B 恐怖:(体験のないNs.)	感情	○共感 ○ネガティブな感情(偏見・差別を抱いている医療者へ怒り)
A 身近な問題をもった同じ人間としての価値(アメリカで育ったNs.) B 特別な問題をもった異なる存在(日本で育ったNs.)	価値	○同じ人間としての価値 ○ケアで大切なこと:正直であること ※Non Judgement
A 薬物依存症は治療・ケアを要する病気 B 薬物使用は法律違反、悪い人(日本で育ったNs.)	知識・理解	○薬物を使用する背景のより深い理解・同じ人間としての共感
A 他の医療者の持つ偏見・差別への反応 B 偏見・差別的(親からの教えの影響)	態度	○偏見を持つ医療者を変えるためのシステムや教育を向上の必要性 ○「同じ人間」の「主」優先・病気や治療はその次

患者とのかかわりを通して、知る、感じる、患者の回復 ← 患者との信頼関係

図1. 学会ポスター発表(寶田ら、2016)の和訳
考察:日本での看護師へのインタビュー調査の結果(寶田ら、2011)(図2参照)と比較検討を行った。日本では、薬物に関連する問題は身近な問題として表面化されていないことによる、薬物問題に対する知識や理解は異なっていた。米国では、薬物依存症者の人数は多く、病気として社会的にも認識されているが、日本ではまだ社会的理解が乏しいと

薬物依存症への看護に関する看護師の変化:日本

ネガティブな感情に変化した看護師 14人へのインタビュー調査より

過去	変化	現在(インタビュー時)
(自らの気づき、周囲からのサポートの中での変化)		
○ネガティブな感情(無力感、怖れ、怒りなど):(身近な人の薬物問題の体験なし)	感情	○共感的
○特別な問題をもった異なる存在(犯罪者) ○ケア大切なこと:理想的な看護、共感、傾聴(→できない葛藤、ごまかし)	価値	○同じ人間としての価値 ○ケアで大切なこと:できないことを認め、ごまかさず、素直な自分の気持ちを表現(正直であること)
○薬物使用は犯罪 ○看護の目的は、患者に薬物の使用をやめさせること	知識・理解	○治療・ケアを要する病気 ○回復するのは患者自身 ○薬物を使用する背景の理解
○医師の指示に基づく看護を(受動的なケア)	態度	○看護師の判断と数量での看護を(主体的なケア)

患者とのかかわりを通して、知る、感じる、患者の回復 ← 患者との信頼関係

図2. 英文ポスター発表(寶田ら、2016)の和訳

いった文化的な違いがあったが、薬物依存症者に対しての理解の深まりや実践の質の向上につながるような変化は、米国も日本も類似点多々みられた。文化的な背景の違いはあるが、共通点が認められたことは、薬物依存症ケアの本質的要素として考えられ、今後さらに検討が必要である。

(3) 目的3について

実践者会議の開催

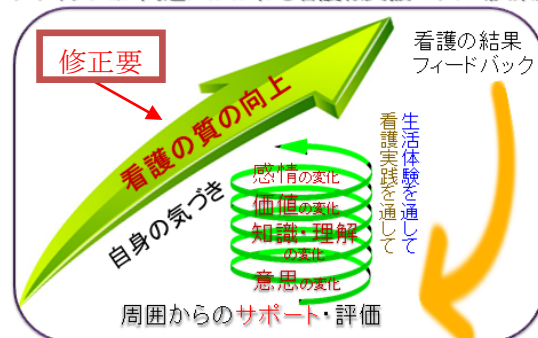
場所:武庫川女子大学

日時:2015年11月22日(日)13:00~20:00

参加者:病院勤務者4人、クリニック勤務者1人

会議の内容:本研究計画及び実施、これまでの研究結果等を説明し、試案の素案(図3)について意見交換を行った。

アディクション問題にかかわる看護職支援モデル(試案)



看護の質の向上に向けてのサポートは、知識や技術の伝達だけでなく、複雑多様な事柄が絡み合ったストーリーの中に存在する(どのようなストーリーか?)

図3. 看護師支援モデルの試案(素案)

試案についての検討:本研究結果からは、変化について「看護の質の向上」の評価はできない。しかし、「ネガティブな感情」の変化をとらえると妥当性がある等の意見を受け、試案の修正を行い、今後発表する予定である。

<引用文献>

Howard & Chung(2000), Nurses' attitudes toward substance misusers. I. Surveys. Substance Use & Misuse, 35(3), 347-365.
Jacobsen, Southwick, & Kosten (2001). Substance use disorders in patients with posttraumatic stress disorder: A review of the literature. The American

Journal of Psychiatry, 158(8), 1184-1190

Kelleher(2007), Health care professionals' knowledge and attitudes regarding substance use and substance users, Accident and Emergency Nursing, 15, 161-165

Stamm, ed(1999)/(2003). 二次的外傷性ストレス. 誠信書房

寶田穂 (2009) 薬物依存症者への看護における無力感の意味 ～看護師の語りより～. 日本精神保健看護学会誌、Vol. 18(1)、11-19.

寶田穂・高間さとみ (2011) 薬物依存症者への看護における質的变化の様相や特徴、日本看護科学学会学術集会講演集30回、p532.

寶田穂・冨喜田恵子・高間さとみ (2012) アディクション問題にかかわる看護師サポートグループの検討、日本精神保健看護学会第22回、182-183

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

寶田穂、薬物乱用や依存の問題をもつ人の回復支援における看護のあり方、公衆衛生、査読無、Vol. 79、2015、pp237-240

[学会発表] (計5件)

- ① 寶田穂・西澤奈穂子・奥村さとみ・冨喜田恵子・谷口俊枝、Qualitative Research on the Changes among Nursing Professionals in Substance Use Treatment、The 19th East Asian Forum of Nursing Schoiars1、査読有、2016/03/14、幕張メッセ国際会議場 (千葉県千葉市)
- ② 寶田穂・奥村さとみ・冨喜田恵子、アディクション問題にかかわる援助職サポートグループ2015(交流集会)、2015/09/05、創価大学 (東京八王子市)
- ③ 奥村さとみ・寶田穂・冨喜田恵子、The Importance of Emotional Support Group

for Nurses Involved Treatment of Patients with Substance Use Problems and Their Families、The 25th International Council of Nurses Conference、査読有、2015/06/22、Seoul (Korea)

- ④ 寶田穂・冨喜田恵子・高間さとみ、アディクション問題にかかわる看護師のサポートグループ 2014 (ワークショップ)、2014/06/22、横浜市立大学 (横浜市)
- ⑤ 寶田穂・冨喜田恵子・高間さとみ、アディクション問題にかかわる援助職サポートグループ 2013 (ワークショップ)、2013/06/15、京都テレサ (京都市)

[図書] (計1件)

寶田穂、解放出版社、ドラッグ問題への取り組みと感情、寶田穂・大久保圭策監修、ドラッグ問題をどう教えるか、2013、pp72-77

6. 研究組織

(1) 研究代表者

○寶田 穂 (TAKARADA, Minori)
武庫川女子大学・看護学部・教授
研究者番号：00321133

(2) 研究分担者

○冨喜田 恵子 (TAKITA, Keiko)
愛知医科大学・看護学部・教授
研究者番号：50226966

○奥村 (高間) さとみ (OKUMURA, Satomi)
鳥取大学・医学部・講師
研究者番号：90588807

(3) 研究協力者

○西澤 奈穂子 (NISHIZAWA, Nahoko)
Alliant International University・California School of Professional Psychology・Associate Professor

○谷口 俊恵 (TANIGUCHI, Toshie)
武庫川女子大学・看護学部・助教
研究者番号：20757455